

J S N P 東日本大震災対策WG 宮城県仙台市一石巻市 視察報告書

視察日時

平成 23 年 4 月 13 日（水）～14 日（木）

視察者

山田清文（名古屋大学医学部附属病院・薬剤部、WGリーダー）

曾良一郎（東北大学院・医・精神神経生物学、WGメンバー）

池田和隆（東京都医学総合研究所、WGメンバー）

視察内容

4 月 13 日午後、石巻赤十字病院と石巻地区避難所（渡波小学校）を視察、14 日午前は東北大学病院薬剤部と宮城県保健福祉部薬務課、14 日午後は宮城県公務研修所、宮城県薬剤師会および東北薬科大学を視察して関係者と面談した。各施設における調査結果は以下の通りである。

1. 石巻赤十字病院（石巻地区拠点病院）

飯沼一字先生（病院長）、石井 正先生（宮城県災害医療コーディネーター）、我妻仁先生（薬剤部長）、上野修一先生（愛媛大学大学院医学系研究科・脳とこころの医学・教授、愛媛大学医療チームメンバー）と面会し、石巻地区における医療の現状と医薬品供給に関する問題点を調査した。



(1) 石巻赤十字病院への緊急支援医薬品供給ルートには以下の3つがあり、周辺の救護施設

や拠点病院からの要請により石巻赤十字病院から緊急支援医薬品を供給している。なお、当初は石巻赤十字病院が緊急支援医薬品を送っていたが、マンパワーの不足から発送が困難となり、緊急支援医薬品リストを通知して必要な医薬品を各施設から取りに来てもらう方式に変更した。

- ① 製薬協、その他施設・グループ等からの緊急支援医薬品 → 県薬務課 → 石巻赤十字病院
- ② 個人・グループ等からの石巻赤十字病院への直送・持参
- ③ 厚労省 → 仙台医療センター → 石巻赤十字病院

(2) 各地からの医療チーム（のべ 126 チーム）には薬剤師がいるチームといないチームが半々であり、薬剤師がいないチームには薬剤部からの医薬品の提供がスムーズにできなかった。さらに避難所を巡回する医療チームにおいても、薬剤師がいないと被災者

への診療の効率が半減するとの報告を聞いた。薬剤師不足が医薬品管理・供給、診療の効率を難しくしていると思われる。

- (3) 石巻市薬剤師会と石巻赤十字病院で移動薬局をつくり、各避難所などを回って薬の管理と処方せん調剤を行った。
- (4) 石巻地区に支援に来ている心のケアチームと DMAT などの身体ケアチームと連携するための調整・仲介の仕組みが乏しく、各方面から連携が出来るように働きかけが行われている。
- (5) 石巻日赤に寄付された向精神薬は身体ケアチームには活用されたが、心のケアチームには十分に利用されていなかったことから利用の周知をした。
- (6) 石巻日赤には精神科がないので、成田赤十字、横浜港赤十字から精神科医が長期支援に来る。
- (7) 日赤の身体ケアチームと心のケアチームとの連携不足に加え、日赤の臨床心理士と心のケアチームの連携不足についても報告された。



我妻薬剤部長との面談



石井外科部長（宮城県災害医療コーディネーター）との面談



飯沼院長との面談



愛媛大学上野教授との面談

2. 石巻地区避難所（渡波小学校）



石巻市の被災地



渡波小学校

田中雄大先生（石巻赤十字病院、臨床心理士）の仲介により、石巻地区避難所（渡波小学校）を視察した。ここには約 580 名の被災者が体育館と教室で避難生活をしている。看護協会から派遣された島袋看護師と面談した。

- (1) 災害救護の研修を受けた看護師数名がシームレスに滞在し、避難者のケアをしている。
- (2) OTC 等に不足はない。
- (3) DMAT が巡回しており、医薬品の不足は感じない。
- (4) お薬手帳があれば、看護しやすい（ただし、ほとんどの人は持っていない）。
- (5) 被災後一ヶ月経過し、避難所に留まる被災者は半減している。働ける年代の被災者は仕事を求めて避難所を離れ、残っているのは高齢者、子供の比率が増えている。



島袋看護師との面談

3. 東北大学病院

宮城県内におけるボランティア薬剤師の配置、周辺拠点病院、門前薬局への緊急医薬品の提供を行っている眞野成康先生（教授・薬剤部長）と久道周彦先生（副薬剤部長）と面談した。



眞野薬剤部長、久道副薬剤部長との面談

- (1) 震災直後、多数の被災患者が石巻赤十字病院やその他の拠点病院に運ばれて薬剤師のマンパワーが不足したため、東北大学病院薬剤部の薬剤師を派遣した。
- (2) 大学病院、院外薬局および各拠点病院における薬品を確保するため、約 20 億円の医薬品を発注するとともに、院内の処方日数を 2 日間とした。
- (3) 災害後、東北大学眼科学教室は、学会と東北大病院が連携して医療チームを結成し、眼科用の緊急医薬品も独自に入手して活動したようである。眼科チームは情報共有もでき、医薬品の管理・使用も上手くいったようである。
- (4) 被災地の医療現場は大変混乱し、マンパワーも不足している。ボランティア薬剤師の受け入れ・配置管理などは、関連学会から担当者が現地入りして指揮するなど、人的支援がなければ困難である。
- (5) 支援医薬品の仕分けには、東北大学薬学部学生および東北薬科大学教職員にボランティアとして手伝ってもらった。
- (6) 県の薬務課は大量の緊急支援医薬品を管理しているが、その存在がほとんど知られていないので、あまり活用されていない。
- (7) 県の薬務課が引き受けきれない多量の緊急支援医薬品が埼玉あたりの集積所にあるらしい。

4. 宮城県保健福祉部薬務課

氏家國夫薬務課長（4月の人事異動で着任）、佐藤重人 技術補佐、相澤浩美 技師と面談した。特に、製薬協から送られたはずの支援用向精神薬の行方を調査した。

- (1) 管理上の問題があるので避難所には医薬品を置かず、県の保管所（公務研修所）に全ての緊急支援医薬品を保管している。請求があれば保管所から医療チームや避難所の仮設薬局に搬送するという体制（卸しの役割）で緊急支援医薬品の供給を行っている。
- (2) しかし、この寄付された医薬品の中の向精神薬は、これまでに被災現場では活用されていない。こころのケアチームからの向精神薬の要請があった場合は、薬務課は宮城県の予算から向精神薬を購入して提供している。
- (3) 寄付された向精神薬を使わずに宮城県の予算から向精神薬を購入することに問題ないのかとのWGからの質問には、薬務課からは災害支援の法律では可能であるから行っているとの回答であった。法律では許されることではあっても、今後、復興支援に多額の予算が必要となる状況の中で、手続き等が容易であるとの理由



宮城県薬務課における面談

で、向精神薬を購入して提供することには被災者の心情を思うと強い疑問を感じる。

- (4) 保険診療再開後のニーズ低下や保管場所の問題もあり、4月12日以降は支援物資としての医薬品の受け入れを止めた。
- (5) 県が保管・管理している医薬品の情報は、拠点病院、DMAT、県薬剤師会、県病院薬剤師会等へ通知した。これを受け、薬剤師会では会員専用のHPにリストを掲載している。しかし、情報提供が不十分であると思われたので、さらなる情報の関係者への周知を要望した。(その結果、4月15日には下記の宮城県薬務課のHP上に救援用医薬品リストが公表され、情報提供について改善が図られた。)

<http://www.pref.miyagi.jp/yakumu/shinsai/busshi.htm>

- (6) 寄付された向精神薬は製薬協から提供された薬に加えて、学術団体から提供された薬があることは薬務課では把握していた。しかし、個々の向精神薬がどこから提供されたかについては情報が十分に整理されていないと思われた。

5. 宮城県公務研修所

宮城県が緊急支援医薬品を管理している一次集積所としての施設である。製薬協他、様々な施設、ルートで宮城県に提供された膨大な量の医薬品（種類は多くない）が保管・管理されている。ただし、本来業務である研修を再開する必要から、これらの医薬品を長期保管することはできない。



- (1) 製薬協からの薬は宮城県公務研修所に保管されているとのことであったが、実際にはかなりの種類の向精神薬が届いていないことが公務研究所を訪問して判明した。公務研修所で受け入れられない大量の緊急支援医薬品が埼玉県三郷市の集積所でデッドストックとなっている模様。
- (2) 宮城県公務研修所には一次集積所として極めて多量の医薬品が送られてきている。マスク、ガーゼなどの医療用品は屋内に入りきらないために軒下に山積みされていた。この極めて多量の医薬品の仕分けには4-5人の薬剤師、学生などのボランティアが2-3週間かけて仕分けを行ったと聞いた。
- (3) 宮城県薬務課からこの一次集積所に出向されている薬剤師の方々は、自らが仕分けを担当されたことからか、寄付された医薬品が活用されることを強く望まれていた。宮城県庁の薬務課の方々と一次集積所の現場の方々との意識の違いが感じられた。
- (4) 物流が回復して保険診療が再開されるとさらに有効活用が難しくなるという問題点がある。

- (5) 医薬品の仕分けには多数の薬剤師の協力が不可欠であり、医薬品提供の難しさを実感した。
- (6) これら医薬品を有効活用するためには、避難所や拠点病院などへの情報提供の方法が重要である。



緊急支援の向精神薬



別の部屋の緊急支援医薬品

6. 宮城県薬剤師会

生出泉太郎会長および廣重憲生専務理事と面談した。

- (1) 医薬品は宮城県公務研修所、OTC は県薬剤師会館で保管するなどの医薬品等の管理について役割分担をして対応している。
- (2) 今回の救援活動の問題点として、医療チームの連携不足、情報ネットワークの未整備、ガソリン不足などがある。また、官邸主導の方針が出されたために、現場での身動きが取りにくくなった。
- (3) 物流が回復した後は、仕分けのマンパワーを考えると、支援物資よりも義援金（現場が自由に使用できるのは見舞金）が望ましい。



生出会長、廣重専務理事との面談

7. 東北薬科大学

日本神経精神薬理学会、日本生物学的精神医学会にご後援いただき、東北大学医学部が受け皿となり製薬企業から寄付いただいた向精神薬は JSNP 理事として東北大学の曾良が中心となり宮城県のみならず岩手県、福島県にも送られている。この寄付していただいた緊急支援用の向精神薬（約 5000 万円相当）の仕分け、石巻赤十字病院における緊急支援医薬品の仕分けを手伝うため、東北薬科大学の教職員と支援活動をした溝口広一先生（WG

メンバー)、および石巻日赤で薬剤師として支援された教員 4 名の方々と面談した。

- (1) 巡回医療チームが夕方石巻日赤に戻って処方せんを出すので、薬剤師は夜調剤をしてできるだけ翌朝の巡回に間に合わせるようにした。
- (2) 薬剤師も巡回し、薬手帳などから必要な薬を割り出し、届けた。
- (3) 薬剤師は災害時の対応について教育を受けてこなかった。
- (4) 東北薬科大学にはボランティアの要請はほとんど来ていない。



東北薬科大の教員との面談

今回の調査で明らかになった問題点

1. 寄付された緊急支援医薬品が宮城県薬務課によって提供されることは県内の病院薬剤部や薬剤師会にのみ伝達され、被災地で支援を実際に担当する医療チームには周知されていない。宮城県のみならず岩手県、福島県においても同様の状況である可能性が高いと思われる
2. 緊急支援医薬品を使うには薬剤師の参画が不可欠である。薬剤師は医薬品の集積、仕分け、搬送等の後方支援（ロジスティクス）のみならず、被災地の支援基幹病院、救護所、避難所、巡回医療チームのすべてに必要なとされている。
3. 基幹病院、医療チーム、県などの機関間連携が不十分。
4. 行政機関の 4 月の人事異動のために混乱や停滞が生じた。
5. 様々な支援医療チームが連携できるようコーディネートする中核的な役割を担う組織の有無が災害時医療を大きく左右している。
6. 薬学部や関連学会・関連協会などにおいて災害時対応の教育が十分にはなされていない。
7. 急性期から慢性期に移行する今後は「心のケアチーム」の活動が益々重要になると予想される。

提言

1. 災害対策委員会の発足

本学会会員には、医師、薬剤師、製薬会社社員などが多く含まれており、横のつながりがある。本学会は学術団体であるが、国難ともいべき今回の大震災に際し、各種医療機関、職能団体、企業との連携や、行政への働きかけなどを行う時限付きの委員会を学会

内に発足させる。災害対策委員会では、今回の問題の解決へ貢献するとともに、将来の災害時の対応策を検討する。

2. 日本神経精神薬理学会年会における緊急シンポジウムの開催

東日本大震災における医療救援活動と向精神薬の提供に関する問題点を分析し、日本神経精神薬理学会として今後の対策を討論するための緊急シンポジウムを本年度の年会で開催する。

3. 行政への提言

今回の調査により、製薬協から無償提供された災害支援医薬品の被災地への搬送と情報提供に問題があり、これら医薬品の有効活用が十分に行われなかった可能性が浮かび上がった。この点について、日本神経精神薬理学会として厚生労働省、製薬協などに調査と実態解明を要請する。また、今後の大規模災害時には人事異動を延期するなどの対応を要請する。

4. 災害時医薬品活用システムの構築

緊急支援医薬品に関する情報を一元的に管理し、それを有効活用するシステムの整備が不十分である。この問題の解決には薬剤師の活動が不可欠であり、今回の調査でも薬剤師の重要性が浮かび上がった。薬剤師の資格を持つ本会会員、ならびに日本病院薬剤師会、日本薬剤師会等と連携し、早急に災害時医薬品活用システムを整備する必要がある。また、薬剤師の災害時対応の教育を関係部署に要望する。

J S N P 東日本大震災対策WGメンバー

山田清文（名古屋大院・医・医療薬学・薬剤部、WGリーダー）

曾良一郎（東北大院・医・精神神経生物学）

池田和隆（東京都医学総合研究所）

溝口広一（東北薬科大学・機能形態学）

J S N P 東日本大震災対策WG顧問および被災地視察協力者

鍋島俊隆（名城大・薬・教授、WG顧問）

現地におけるWG活動に関するアドバイス

中里信和（東北大・医・てんかん科、WG顧問）

現地における医療活動に関連する情報提供

松田公子（日病薬、副会長、被災地視察協力者）

現地における薬剤師の活動の情報提供、宮城県薬との連絡調整